
FAKE ～偽りの翼～

流水郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAKE 〜偽りの翼〜

【Nコード】

N9283G

【作者名】

流水郎

【あらすじ】

21XX年。制空権奪取のため、作戦を展開する日本海上自衛軍の空母・『武蔵』の艦載機部隊。熾烈な戦いが始まり、仲間も敵も次々と散っていく。……しかし、その実態は……？

(前書き)

これは、「海上自衛隊が空母を持つにはどうしたらいいか」(良い悪いはひとまず別として)というのを俺なりに考えてみたことから生まれた物語です。

とはいえ、完全「空想」です。

主人公の「服装」に注目してみてください。

勘の良い方なら、そこで「もしや」と思うかも知れません。

21XX年

……浜辺に駐留する、歩兵部隊。

迷彩柄の軍服を着て、各自が武器の手入れなどを行っていた。

「隊長！」

若い兵士が、指揮官の元に駆け寄ってくる。

「今日の正午、海上自衛軍の空母『武蔵』が、この付近の制空権を奪取するそうです。我々もその機に乗じ、この島の敵陣地を攻略せよとのことですよ」

「……そうか」

指揮官は、曇った空を見上げた。

そして溜め息を吐く。

「航空部隊は、全く気楽なもんだ。コクピットから出れば何も出来ない癖に」

「隊長、どうかもう少し穏便に……」

「ふん！ 今の戦闘機乗りなど、まだ蠅の方が根性があるさ。奴

らは軍人のクズだよ」

「それは自分も同意見ですが……」

不機嫌そうな指揮官を、兵士はどうかだめようとする。

「まあいいさ、歩兵は歩兵の仕事をこなそう。準備を整えておけ」

………

………

………

《嫌な天気だなあ》

《ああ、雨が降らなければいいが》

海上自衛軍主力戦闘機『雷閃』5機が編隊を組み、音速で飛行する。彼らの他にも、多数の部隊が編隊を組んで飛んでいた。

全天候型とはいえ空模様が怪くなり、パイロット達は不安げだ。

「さっさと終わらせて帰ればいいじゃない」

3番機のパイロット、中井由美二尉が言う。

着ているのは半袖の軍服で、肩の部分に旭日旗が描かれていた。
まだ少女のあどけなさを残す顔に、笑みが浮かんでいる。

「これだけの大部隊なら、すぐに終わるわ」

《まあな》

《コントロールより各機へ。『武蔵』のレーダーが敵編隊をキャッチ。数は45。各機超音速巡航を終了し、戦闘態勢に入ってください》

母艦レーダーの索敵データが、ディスプレイに表示される。

多数の赤い点が、接近していた。

《敵も結構な大判振る舞いだな……了解、テンマ1、エンゲージ！》

《テンマ2、エンゲージ》

「テンマ3、エンゲージ」

他のパイロット達も、次々と「交戦」^{エンゲージ}の声を上げる。

スロットルを絞って速度を落とし、ドッグファイトの体勢を取る。

《敵機、対空ミサイル発射！ かなりの数です！》

《正面でこの距離なら当たらない！ 直進しろ！》

正面からなら、対空ミサイルの命中率は半減する。
加えて探知能力外ならば、それは囷ということだ。
速度を上げて直進するテンマ隊だが、最後尾の5番機が突如進路を
変えた。

《こら、テンマ5！ 村川！》

《あ、当たる！ 当たるっ！》

パイロットの半狂乱の声が聞こえてくる。

「馬鹿ッ、編隊が離れちゃ駄目！」

直後、轟音。

5番機が空中で爆発し、機首が粉々に碎け散った。

《村川が撃墜されたぞ》

《まったく、下手くそが》

「もう、いつもここぞってところでビビるんだから……」

中井は溜め息を吐きつつ、後方を見た。

5番機を撃墜した敵の主力戦闘機『ダッシュキヤット』が、旋回し
て後ろから迫ってくる。

《各機散開！》

ドッグファイトが始まった。

中井は巧みに旋回し、『ダッシュキャット』の後ろにつく。敵は機首を上げて上昇、中井もその後を追いつ、ロックオンした。

「テンマ3、フォックス・ツー！」

中井は発射ボタンを押した。

機体側部のウェポン・ベイから、2発の対空ミサイルが発射される。しかしその瞬間、敵機はくると横軸で向きを変えた。

「！ハンマー・ヘッド！？」

垂直上昇後の持つとも速度が落ちた段階でラダーを使い、主翼の先端を軸に反転するという高等技術。

敵機の急激な方向転換により、ミサイルは命中しなかった。

中井の『雷閃』と『ダッシュキャット』はすれ違う。

「不味い！」

『ダッシュキャット』が反転し、中井の後ろについた。

ロックオンアラートが鳴り響き、中井は急旋回を繰り返したかわそとする。

だがその直後、中井の背後で『ダッシュキャット』が爆散した。そして彼女の頭上を、僚機が通過していった。

《テンマ3、無事か？》

「隊長、ありがとうございます」

周囲では火線が交差し、敵も味方も次々と墜ちていく。

中井はそこをかいぐりつつ、敵の指揮官機を探して辺りを見回した。

……が。

《コントロールより各機へ、緊急事態です！ 敵の新型ステルス攻撃機が5機、超低空で『武蔵』に向かっていきます！》

「何ですって！？」

《大至急、撃墜に向かってください！ 敵の位置データを送ります！》

中井は周りを見渡した。

敵部隊は腕利きを集めたらしく、味方も苦戦している。だが、このままでは空母を撃沈されてしまう。

《テンマ2、テンマ3、テンマ4！ ここは俺達が引き受ける、行け！》

《海自全機へ！ テンマ隊を援護せよ！》

中井たちの近くにいる敵機を駆除すべく、各部隊が集まり始めた。

《テンマ3、行くぞ！》

「……了解！」

敵攻撃機の方へ機首を向け、アフターバーナーを全開にした。

『ダッシュキヤット』1機が後を追おうとしたが、後方から援護に

入った別の『雷閃』に邪魔される。

《極超音速飛行、開始！》

3機の『雷閃』が、まさしく稲妻のように飛ぶ。

マッハ計の針が右へ傾いていき、音の6倍の速度を示した。
凄まじい加速力だ。

《母艦からの索敵データではもうすぐだ、スピードを落とせ！》

「ドップラーレーダーには何も写らないわ。ステルス性が高い上に、かなり低いところを飛んでいるのかも」

《よし、空戦サーモグラフィに切り替えろ！》

中井はディスプレイを、新型の空戦用熱探知機に切り替えた。
海の上に、赤い点がいくつか見える。

《熱までは隠せてないようだな》

「この距離だと、すぐにすれ違うわ！」

《スプリットSで反転する！後は目視でやるぞ！》

三機は背面になって操縦桿を引き、「つ」の字の軌道を描いて降下・反転した。

高度を下げつつ、中井は目を凝らし、海の上を睨む。
すると、海面近くを飛ぶ青黒い機影がなんとか確認できた。

「いたわ！私が先に攻撃する！」

《よし、頼む ！ 》

下部ウェポン・ベイのハッチを開き、ミサイルの発射用意をする。速度を調整しつつ敵機に近づき、5機のうち4機が同時にロックオンされた。

「ターゲットロック、フォックス・ワン ！」

四発の中距離ミサイルが発射される。

青黒い海上迷彩の機体は、それに気づいて散開する。

慌てて上昇した2機が直撃を受けて散ったが、残りは回避された。

《よし、こっちでも敵を確認した ！ テンマ2、フォックス・ワン ！ 》

《テンマ4、フォックス・ワン ！ 》

僚機も、ミサイル四発を発射する。

しかし敵の攻撃機たちは高度を上げ、空中に多数の光球を散布した。ミサイルは見当違いな方向へ飛んでいく。

《ちっ、かなり高機能なフレアだ ！ 》

「機銃で攻撃する ！」

中井は最後尾にいる1機の未来位置を予測して照準を合わせつつ、発射ボタンを押した。

布を裂くような音と共に、20mm機関砲が発射される。

曳光弾のオレンジ色の光が尾を引き、敵機に弾痕が穿たれた。

直後に燃料タンクが爆発し、敵機は四散した。

「3機目撃墜！」

《負けてられないな！》

テンマ2と4も機銃を発射する。

敵機は巧みに回避するが、やがて1機が墜ちた。

《残りは1機だけだ！テンマ2、フォックス・ツー！》

《テンマ4、フォックス・ツー！》

合計四発の短距離ミサイルが敵機へと迫る。

だがその途端、敵機は急降下を始めた。

「！」

中井は目を見張った。

その敵機は海面に突入する寸前で引き起こし、上昇。

ミサイルはその動きについて行けずに、海面で爆発した。

「相当な手練れよ！」

《くそっ、もうミサイルは無い！機関砲だけで墜とすぞ！》

《俺が先に撃つ、奴が避けたところを狙え！》

テンマ4が20mm機関砲を発射した。

敵機はくるとロールし、火線をかわした。

中井は素早く照準を合わせ、ラダーで軌道を修正しつつ、発射ボタンを押した。

だが、当たらない。

敵機はまるでこちらの動きが読んでいるかのように、巧みに旋回して攻撃を避ける。

「うう……！ 空母は撃たせない！」

《当たり前だ！》

『雷閃』3機は必死で敵機を狙う。

しかし敵機は高レベルな空戦機動を多用し、巧みに回避する。

中井はこの実力差に苛立ちつつ、相手を撃墜する手段を考えた。そして、彼女の結論は……

「……テンマ3、これより敵機への体当たりを敢行します！」

《仕方ねえな、『武蔵』を沈めさせるわけにはいかねえ》

《テンマ4も了解。援護するぜ》

あっさりと、仲間達は承諾した。

中井は歯を食いしばって、エンジン出力を上げ、敵機に肉迫する。

敵機のパイロットはそれを察したのか、旋回してかわそうとした。

そこへ、テンマ2と4が機銃による援護を行う。

敵機は逆方向へ切り返し、そのまま急旋回しようとするが、中井の『雷閃』は推力偏向ノズルの力で、敵機の未来位置へと機首を向けた。

「はああああ　！！　」

……次の瞬間、『雷閃』の機首が敵機にめり込み、凄まじい衝撃音が響き渡った。

中井は目を閉ざす。

【本機は撃墜されました。パイロットはコクピットから出て、データカードを提出してください】

コクピット内にアナウンスが響き渡る。

中井が目を開けると、視界は黒一色で、操縦席の端にあるスイッチだけが点灯していた。

中井がホッと息を吐いてそのスイッチを押すと、ハッチが音を立てて開いた。

「お疲れ様です、二尉」

整備兵が手を差し出す。

中井はシートベルトを外し、整備兵の手を借りて『コクピット』から降りた。

彼女が乗っていたのは白いカプセル型の機械で、その中には戦闘機の『操縦席』が再現されていた。

そしてホールのように広いこの部屋には、同様の機械が百台近く並んでいる。

「いやあ、見事な体当たりでしたよ。おかげで『武蔵』は沈まずに

済みました」

整備兵が言う。

「今ここで『武蔵』を失ったら、不味いものね」

「ええ、無人空母とはいえ、あのレベルの航空母艦を造るのは多大な時間と金がかかりますから」

「あ、隊長達は？」

「はい、敵の戦闘機部隊は退却しました。残念ながらテンマ隊の天野隊長は撃墜されまして、今パイロットルームで休憩中です。あ、それと村川三尉ですけど、今回も初っぱなから撃墜されて落ち込んでます」

「落ち込むんだったら、もう少し冷静さを保ってもらわないとね。撃墜されたって死ぬわけじゃないんだし。……おっと、データカードを忘れてた」

中井は『操縦席』の機器からカードを抜き取り、整備兵に渡した。

「はい、お疲れ様です。ごゆっくりお休み下さい。空母を守ったのですから、勲章物ですよ」

「ふふっ、親が喜ぶわ」

……人間が直接戦闘機に乗り込むことは、この時代ではもう無い。

戦闘機のコクピットのみを基地に置き、パイロットはこれを通じて無人機を遠隔操作する。

そして、それらの無人機が搭載される空母も、コンピュータにより制御される無人空母だ。

元々は、数千人は必要な空母の乗組員を確保できない海上自衛隊が開発したシステムだが、今では世界中の軍隊で採用されている。

人が空の戦場で血を流すことは無くなり、「戦争は悲惨である」という概念すら、パイロット達は忘れていた。

……

(後書き)

主人公の服装について

半袖……もちろん対Gスーツは無し。

これで超音速戦闘機に乗りう物なら大変なことになります。
遠隔操作の無人戦闘機であるという伏線として入れました。

冒頭の歩兵部隊について。

歩兵の存在意義が失われることはありません。

無人兵器が発達しても、敵陣地や市街地の「占領」は歩兵無くしては不可能です。

この世界では、彼らは戦争の本質を知らないパイロットたちを嫌悪しています。

敵国について

ぶっちゃけ、何処の国かは決めていません(汗)。

まあ、自衛隊VS中国軍というネタは最早使い古されたものと判断したので、それ以外ということ。

……現在無人機の開発が進められ、対地攻撃機はそのうち無人化されるかもしれません。

戦闘機もいつかはこうなるかも……。

しかし、それは戦争がゲーム化してしまうことに他ならないと思うのは、俺だけでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9283g/>

FAKE ～偽りの翼～

2010年10月16日00時33分発行